

2021年ヨーロッパキリスト者の集い 実行委員会の方針

私たちは、従来の一教会が企画準備運営まで全てを担っていたモデルから、欧州の諸集会・教会から召命感をもつ代表者を出していただき、“実行委員会”を構成して、集い開催のための業務を分担し、新しいモデルを構築していきたいと考えております。36年に亘る“集い”の歴史で、このような試みは初めてですから、果たしてうまく機能するかどうか確信は持てません。しかし主の栄光のため、4つの教会（パリ・プロテスタント日本語キリスト教会、スイス日本語福音キリスト教会、南ロンドン日本語キリスト教会、ミュンヘン日本語キリスト教会）が心と力を合わせ、4教会を主催教会として2021年の開催を実現したいと願っています。

2020年2月にヨーロッパ諸集会・教会に配布しました趣意書の中で、2021年の集いを4つの教会が主催者として名乗るのは、従来の枠組みのなかで催行する意思表示をするものです。それを、あらたに協力教会として併記するのは、受け取り手にいたずらに混乱を生じさせるだけでなく、主催教会と協力教会では何が違うのか、明確に説明しなければなりません。そのため4つの教会は協力教会ではなく主催教会という表現で位置付けました。

〇〇教会は主催教会なんだから、何でも受け止めてくれるだろう、といった過大な期待で捉える方が決してないとは言いきれませんが、それが特定の教会に向かうとは考えられず、仮にあった場合は、教会ではなく実行委員会がきちっと対処するでしょう。これまで委員の中で長時間をかけて話し合い、主の栄光のためにとそれぞれが共通認識を形成し、これから実質的には委員を中心に、4教会は（上下関係なく）等しく、できる範囲での協力をしていくこととなります。主催教会とは、実行委員会に委員を出し、その委員と委員会のために祈り、そして必要な支援の手を差し伸べる意思を表明したキリストの体である教会です。

現在導かれております2021年集いのスタイルは、従来の枠組みのなかでの催行。ただし、通常3年をかける準備作業をその半分の期間で行うため、みことばに聴く／祈りに最重点を置いた思い切ったシンプル化です。シンプル化こそ今後も集いを継続させて行くための鍵であり、2021年はそのために試行錯誤を重ねていく年となることが考えられます。そのことが主の導きに従っていくこと、2022年以降の集い開催のステップにもなることを願います。

2020年4月12日

第37回集い実行委員会一同